

# 北のとぴら

vol. 137

令和7年11月



空知南部エリア  
特集

特集 | 山田由梨(贅沢貧乏主宰) interview

## 贅沢貧乏『わかれうとはおもっているけど』

アート巡礼 空知南部エリア／つくる人in月形町 久保奈月／ジモトデザイン 奈井江町・ずどーん  
マチカド芸術 長沼町『Ancient Sun』／ART FILE 佐藤寧音



山田由梨 (やまだ・ゆり) / 1992年東京生まれ。作家・演出家・俳優。2012年に劇団「贅沢貧乏」を旗揚げ、全作品の作・演出を担当。岸田國士戯曲賞最終候補2度ノミネート。舞台・映像・文筆と多方面で活躍し、国内外で注目されている。

『わからうとはおもっているけど』の創作のきっかけを教えてください。

**山田** この作品は私が27歳の時に書いたものです。20代後半には差し掛かると、これまでとは異なり、女性の生き方や結婚、出産といったものが自分ごととして迫ってくるようになりました。「早く結婚しなさい、出産しなさい」という圧力が、社会全体から自分に向けて発せられているんだ、と感じてきて

そうした中で、政治家による女性蔑視発言があり、これらの発言もまた、自分に向けられているものだと感じはじめました。同時に、フェミニズムに関する本を読んでいた時期でもあったので、二つの激流が私の中に入ってきた感覚でした。男女平等とはいけれど、「産む身体」と「産めない身体」という決定的な性差は絶対に埋められません。だとしたら、その決定的な違いがあった

うえで、私たちはどこまで互いに寄り添えるのだろうか、ということを考えていかなければならない。女性が差別され、優遇されていないことはもちろん大きな問題です。しかしそこから歩進んで、「どうしたら良い方向に進めるのか」「どうしたら分かり合えるのか」ということを見つめたいと考え、作品のテーマとしました。

妊娠によって女性に起こる心身の変化への戸惑いに対して、男性も決して悪意を持って接しているわけではないのに、なかなか分かり合えない様が非常に繊細に描かれていました。初演時の反応はいかがでしたか。

**山田** 本場にさまざまな声が届きました。反省モードに入る男性もいましたし、性差によって埋められない溝が寂しいと感じる方もいたり。他の話題では男女関係なくわかり合えていたのに、この作品では意見が異なってしまう、という声もありました。

女友達が、「これは彼に見せなければならぬ！」と彼を送り込んでくることもありましたが、「この人に見てほしい！」と具体的に思いつくかぶ作品だと思います。

観劇後に話し合いたくなる作品ですね。

**山田** そうなんです。女性に向けた作品というよりは、さまざまな世代、多様なセクシャリティの方に観てもらいたいと思っています。そもそも、悪意を持って他者を傷つけようとする人なんて、ごくひと握りだと思うんです。多くの場合は、想像が至らなくて間違えてしまったり、意図せず誰かを傷つけてしまっているだけで、社会にいる誰もが、より良くしようと思つて行動しているはずなんです。でも、その行動の多くが、男性に偏ったジェンダーバランスのもとに行われているため、女性の視点や意見が反映されていないという問題がある。それは、良い社会を望んでいるはずなの

に、相手の立場を想像するきっかけがなかっただけだと思うんです。どれだけ互いをわからうと努力しても、わかりきることは難しい。その限界を理解しながら、コミュニケーションを取り続けるしかないんですよね。女性も年代によってさまざまな中で、中にはフェミニズムという価値観に拒否感を持つ女性もいます。でもそれは、これまで刷り込まれてきたものとは異なる価値観を目の前に提示され、急に「それは女性差別だ」と言われたら、自身の人生を否定された気持ちになるからだだと思います。男性もまた、「男らしくあるべき」という刷り込みのもと、それが正しいと信じて頑張り、女性を養うべきだと思つて生きている場合もあります。年代や性別も含め、異なる刷り込みのもとで生きていた人たちに、ひとくくりに「平等」を強いると無理が生じてしまう。だからこそ、刷り込まれてきた時間も含めて想像

やさしく、繊細に、コミカルに。

男女の性差を問う

笑えて、考える意欲作



贅沢貧乏が北海道で初めて上演するのは、2019年初演、2022年にパリで好評を博した『わからうとはおもっているけど』。多彩な手法で男女の性差を繊細に問う本作について、主宰の山田由梨さんに創作のきっかけを伺いました。

山田由梨 (贅沢貧乏主宰) Interview  
贅沢貧乏『わからうとはおもっているけど』





はどうしたって時間がかかるんですよ。コロナ禍でリモートワークが普及した際も、圧倒的に女性のほうが家事をしていることが多かったというデータもあります。でもそれって、私たち女性も意識の中に染み込まれているものですよ。お茶を入れるのも、食事の支度をするのも、男性は座った

ままで、女性も立ち上がって  
 キッチンへと向かう。政治が  
 どうということではなく、自  
 分の中に染み込んでしまっ  
 ているんです。  
 この作品はそうした課題に  
 真摯に向き合う作品である  
 と同時に、非常にコミカルで  
 声を上げて笑うシーンがい  
 くつもありました。異なる  
 立場、異なる考えによる

会話と会話のすれ違いって、  
実は演劇で表現すると非常  
にコミカルですよ。

**山田** そうなんです！バリの劇評で「演劇で学ぶ、やさしいフェミニズムの入門書」と評していたいたのも、コミカルで抵抗なく見られるという点での評価でもあったのだと思います。フェミニズムと聞くだけで、「怒られている気がする」「真面目な作品なんですよ」と、遠ざかってしまう人も一定数いると思いますが、フェミニズムという言葉に引きずられず、「フライヤーのビジュアールが良い！」とか、気軽な気持ちで劇場に足を運んでもらってもいいんです。事前にも勉強なんて不要だし、大学で上映したこともあるのですが、大学生の反応はすごくビビッドで最高でした。

す。

**山田** 終演後に北海道出身の詩人・文月悠光さんとのトークショーもあります。文月さんとはお会いし

**information**

贅沢貧乏

『わかれうとはおもっているけど』

[作・演出]山田由梨 [音楽]金光佑実

【出演】大場みなみ、山本雅幸、佐久間麻由、大竹このみ、青山祥子

[日時] 2025年12月13日(土)18:00開演(★)・14日(日)13:30開演

※開場は開演の30分前 ※上演時間約70分

★12/13(土)終演後に山田由梨さんと文月悠光さん(詩人)によるトークがあります。

〔会場〕 クリエイティブスタジオ（札幌市中央区北1条西1丁目 札幌市民交流プラザ3階）

【チケット】 前売券 一般/3,500円 U25/ 2,000円

当日券 一般/4,000円 U25/ 2,500円

## STORY

**STORY** テル(大場みなみ)とこうちゃん(山本雅幸)はどこにでもいるような普通のカップル。あるとき、テルが妊娠した、という出来事から空気が変わり始め、彼女の友達(佐久間麻由)や、なぜか家にいるメイドたち(大竹このみ・青山祥子)を巻き込んでゆく。「女性」と「男性」の「わかりあえなさ」を「わかりあおう」とした先にあるものとは――。



公演に関するお問い合わせ

公益財団法人北海道文化財団 TEL 011-272-0501 (8:45-17:30 土日祝除く)

詳しくはこちら

チケット  
好評発売中

たことはあるのですが、ゆっくりお話する機会がなかったので、今回文月さんの出身地である札幌でお話できることが非常に楽しみです。札幌で公演するのは私自身初めて。たくさんの人

ロング版  
インタビューを  
WEBで公開中



に見ていただき、語り合っていたみたいです。

たとえためて思います。

作品を描く際、さまざまな社会問題と向き合わざるを得ないと思うのですが、そこに辛さはないのでしょうか。

**山田** 脚本を書くことは、ある種「自由研究」に近いんです。この作品だけではななく、自分が考えなければならぬ題材を勉強し、飲み込み、自分なりにアウトプット

に辛さはないのでしょうか。

けなければならぬんです。私たちは、批判ではなく、解決を目指しているわけですから。脚本を書くという仕事を通して学ぶことは、今後誰かを傷つける可能性を自分から減らせるということだかなと思います。例えば、ある病気のことを書かねばならぬという時、徹底的に調べますよね。それによって、私はそ

山田  
パリは日本に比べる

白くないと判断したら途中退席が当然とされていると言われていますが、この作品は連日満員で大盛況でした。

**山田** パリは日本に比べる

と進んでいる部分はもちろんありますが、男性優位主義は依然として残っています。

表面的には日本よりも改善されているように見えますが、根本の意識を変えるの

うとおもっているけど」というタイトルには、そうした想いを込めました。

劇中の男性は、優しくて理解のありそうなタイプなのですが、後半、ある仕掛けによってこれまで感じていたものが一転しました。

**山田** 実は、稽古場でも彼のことをかわいそうだ、という声もあったんです。けれど、その後半のシーンになると彼のことを「ムカつく！」と

と言いつ出して（笑）。みんな、自分に刷り込まれていたバイアスをそこで気づくんですね。私自身もまた、そうしたバイアスを刷り込まれていたことに、書きながら気づきました。

初演から6年が経ちましたが、山田さん自身にも変化はありましたか。

**山田** この作品を書いていた当時、私もまだフェミニズムを考え始めたばかりでした。それまでは、自分が女

で、どちらかというと性を扱ったくはなかった。けれど、社会の中で女性としての役割を求められるようになった時、そこに対抗していかなければならない時代が私の中で始まったんです。この作品は、戸惑いながら書いていたので繊細さがあるんですよね。あれから6年以上が経ち、私の中にはもう戸惑いはなく、だいぶ強くなりました。社会には、さまざまな地点にいる人がいて、今もなお戸

する、このプロセスが研究に近いと思ってい  
ます。

山田さんの作品は、片方の立場に偏ることのないバランスが保たれていますよね。

**山田** 主人公にとって「言われたくないこと」とを言う人物を配置する際、その人物がんな発言をするのかをしなければならぬ。自分の立場だけではな  
い世界にいるあらゆる

の病気を深く知ることができ、今後、無意識に誰かを傷つけずに済む。それは私の人生にとつてとてもありがたいことだと感じています。



この世界にいる、あらゆる人の立場を想像する



# 空知南部 エリアで 探すアート

各施設の  
詳細は  
WEBで  
公開中



## 11 田んぼの真ん中にたつカフェ Cafe晴耕雨読



浦臼町の田園風景を眺めつつ、歴史や文化に触れるアドベンチャートラベルの拠点。地域の方々の憩いの場として、浦臼産農産物を使用した料理を満喫することができます。

## 10 月形町の文化芸術発信拠点 TSUKIGATA art VILLAGE (ツキガタアートヴィレッジ)



廃校を活用し2022年に誕生した、地域資源を生かした文化芸術の拠点。アートギャラリー・シェアアトリエを完備した、地域密着型多目的施設です。アトリエやレンタルスペースの利用希望など随時募集中。

## 09 北海道教育大と岩見沢市の協同で開設 北海道教育大学岩見沢校 i-BOX



JR岩見沢駅舎内にある市民と学生の活動情報拠点。美術展や、大学の活動などを市民に向けて紹介しています。学生有志による企画展『明日への創造2025』を12月7日まで開催中。

## 08 築100年の古民家をDIYでリノベーションしたカフェ cafe&space genya.



古き良き趣きが残る古民家で、アーティストによる作品展を不定期で開催しています。営業日の火曜日は、genya.オリジナル服「mee too」の縫製工房として活用。洋裁歴50年の職人の技術を見ることができます。



## 06 全国のファッションистたちが足を運ぶ あれこれマート ゆにぞん



独自のファッションカルチャーを発信するアパレルショップ。町民が個性豊かな派手な衣装を着てランウェイを歩く「ゆにコレ」を主催するなど、ファッションでまちの賑わいづくりに貢献しています。

## 07 年代物の器や骨董品が並ぶコミュニティスペース アンティークギャラリー あまりや



長沼町の豊かな自然に囲まれたイベント&コミュニティスペース。古伊万里や年代物の洋食器が並ぶギャラリーでは、地元の作家による作品展や、古本市・古布市などを不定期で開催しています。

## 05 北海道最古の酒造の敷地内にあるギャラリー 株式会社小林家 ギャラリーまる田



北海道最古の造り酒屋・小林酒造の歴代社長宅(明治30年建築)の玄関廊下を利用した小さなギャラリー。栗山町出身の切り絵作家・小林ちほの作品を常設展示しています。



## 刺激がいっぱい 空知南部エリアのアートスポット

### 01 奈井江町の合言葉は「まちじゅう音楽」 ゲストハウス「泊まれる音楽室」



いつでもどこでも誰でも気軽に音楽に触れ、交流できる拠点としてオープン。小さな防音室を完備しているほか、ジャズやロックといった音楽のジャンルをテーマにした客室など、音楽にあふれた施設です。

### 02 安田侃の抽象彫刻が約40点点在 安田侃彫刻美術館 アルテピアッツァ美瑛



1992年にオープンした野外彫刻美術館。体験工房では「ここを彫る授業」を毎月第一土日に開催しているほか、ギャラリーでは11月27日～12月18日の期間、美瑛市内小中学校絵画書道展を開催しています。

### 03 美しい日本画や様々な企画展を開催 三笠市文化芸術振興促進施設ciel



アートギャラリーでは、三笠市出身の日本画家・新田志津男より寄贈された日本画の作品を展示。企画展は11月30日まで平向功一展『君の住む街』、12月3日からは『三笠っ子ART展』を予定しています。

### 04 夕張市唯一のジャズ喫茶 Five Pennies (ファイブ ペニーズ)



ジャズを中心に音楽全般を楽しむ喫茶店。緑が生い茂る川沿いに立つ赤い煙突屋根のログハウス内には、貴重なオリジナル盤や機材が並びます。様々なミュージシャンが訪れ、ライブを開催中です。





Ｔシャツ、タオル、トートバッグ、文具などの販売収益は、グッズの開発費用、イベントでの販売活動費、広報活動費など、「ずどーん」を核としたまちづくりの活動に充てられています。



**奈** 井江町では誰もが生き  
がいが役割をもって活  
躍できるまちづくりを目指し、  
2022年から「奈井江版生涯活  
躍のまち」の取り組みをスタート  
しました。「ずどーん」はこの取り  
組みから生まれたキャッチフレー  
ズです。

「ずどーんと伸びる日本一の直線道路、どーんと広がる田園風景、どしんと大らかな町民気質など、奈井江町が持つ有形無形の資源のパワーと、町民のさまざまな想いをのせてまちの魅力を発信したいという思いが込められています」と語るのは、一般社団法人ないえ共奏ネットワークの事務局長・小澤克則さん。この取り組みを推進してきた1人です。

さらにコピーライターの田中  
有史さん、アートディレクターの

浪本浩一人をはじめとする、まちづくりの事に精通したクリエイターが企画段階から参加。「プロに「丸投げ」するのではなく、町側が描く「たくらむまち 奈井江町」という明確なコンセプトを共有し、「ずどーん」を町民のコミュニケーションツールにしたいという目標に向かって一緒に歩んでくれた存在」と小澤さんは振り返ります。

シンプルなひらがなと、長い音引き(ー)が印象的な「ずどーん」の文字。

当初は「ZOODOOON」のようなローマ字表記も候補として検討されていたといいますが、カッコ良さよりも、町民が日常的に使いやすく、子どもからお年寄りまで誰もが親しみやすい見た目を優先し、この表記に決まったのだとか。

アートディレクターの浪本さんは、町民同士のつながりや、町が持つ有形無形の資源が共鳴しあっている様子を表現するために、音引きをつなげてフォントをデザインしました。

「ずどーん」のコピーと合わせ  
て目を惹くのは、陶芸家の藤本  
美歩さんが原画を手がけた様々  
な形のカラフルな台形のイラスト  
です。これは、奈井江町の大自然  
をイメージした造形で、配色は  
四季折々の田の色、山の色、川  
の色、そして多様な人びとをモ  
チーフにしています。



町民の想いと  
くたくらみをのせた  
キャッチフレーズ  
ずどーん

◀ 町内の飲食店では「ずどん」ジョッキが使われたり、冬まつりで「ずどん湯」というネーミングの足湯が登場したりと、町にじわじわと浸透している「ずどん」。ジョッキには、台形の代わりに「カンバイ」のフリーズが続くなど、用途や場面に応じて自由に変化します。

一つの固定された形ではなく、見る人や使うシーンによって伸び縮みしたり、異なる言葉を組み合わせたりするフォントと造形を作り上げることで、「ずどーん」という言葉を視覚的に豊かにし、「みんなで育てていく」デザインを目指しました。

町民の思いとクリエイターの  
創意工夫によって生まれた奈  
井江町の「ずどーん」。この言  
葉が持つ大らかさと多様な解  
釈の余地が、奈井江町の可能  
性を「ずどーん」と広げてくれる、  
そんな期待が膨らみます。



書家 久保奈月

でもありました。

高校卒業後も共和町で仕事をしながら書を継続。20代



久保奈月  
(くぼ・なつき)

共和町生まれ、月形町在住。  
7歳より依頼作家・佐藤藤鳳氏  
に師事。全道書道展、国際現  
代書道展で奨励賞等受賞。  
2014年のアメリカ・シカゴでの  
レジデンスを機に渡米を重ね  
る。2025年、中野北沢記念北  
の書みらい賞・奨励賞を受賞。  
Instagram  
@natsuki\_kubo\_calligraphy

と諭されました」と笑います。

最初の転機は高校時代の書道の授業。教師は瑞鳳先生の息子、毅先生で、「文字を遊ぶような自由な書道、いわゆる遊書を教えてもらいました」と久保さん。美術部で油彩を学んでいた久保さんに

館内やギャラリーでの企画展に参加。2018年にはシカゴのLink Hallで音楽家や舞踏家と共に3日間 にわたる公演に参加しました。海外での活動と比例するように、日本でも書家としての活

た地域交流にも積極的です。

書の基礎を土台に、文字で遊ぶ喜びを広げていく久保さん。「書は線を使った美術」と笑顔で語り、独自の世界を追求し続けています。



合っています。

久保さんが書と出会ったのは7歳のとき。「故郷の共和町で通った書道教室の佐藤瑞鳳先生は、基礎を大切にする方でした」と久保さん。

とはいえ、当時は書道に特別な思いはなく、どちらかといえば絵を描くほうが好きだったそうで、「何度が辞めたいと

る日々が続きました。

表現者としての道を決  
定づけた二度目の転機は、  
2014年。「縁あつて参加  
したシカゴのアーティスト  
レジデンスで、色を用いる手  
法や、書道パフォーマンスに現  
地の人が喜んでくれたこと  
で、創作意欲を刺激されまし  
た」と、振り返ります。その後

動の幅を広げていきました。

結婚を機に2019年、月形町へ移住。翌年には、廃校を活用したアート複合施設「ツキガタアートヴィレッジ」を、改修費をクラウドファンディングで募って開設。「村長」として施設管理を担う傍ら、施設内に自身のアトリエも構えています。地元高

合っています。

る日々が続きました。

動の幅を広げていきました。

**自** 由に、美しく表現さ  
れる文字の芸術。既  
存の枠を超えて、書  
の表現を追求する  
のは、月形町在住の  
書家・久保奈月さん  
です。音や光、チヨ  
コレートを用いたパ  
フォーマンスや、点  
や線を分解し再構  
築する「解体創書」  
など、多彩な手法で  
書と向き

前半には町内に新設されたスケートボード場のイベントで、コンパネに竹箒で書を描くパフォーマンスに挑戦。新たな表現の扉を開きました。

28歳のときに「本格的に書の道へ」と念発起し、仕事を辞めて単身札幌へ。アルパイトと創作活動を両立させ

自

由に、美しく表現される文字の芸術。既

前半には町内に新設された  
スケートボード場のイベント

◀丸を一筆で描く「円相」。禅の書画のひとつであるこの円を、久保さんは立体的なアートで表現しました。





## どこかで見た景色、日常的な光景に少しの想像を絡ませる

**版**画との出会いは、小学生のころに見たテレビ番組がきっかけでした。木版画を摺り、和紙でブックカバーを作る様子を見て、「自分にもできそう」「やってみたい」と感じたことを今でも鮮明に覚えています。この憧れから、大学進学の際には「版画が学べること」を学校選びの条件にしました。

大学3年生で版画を専攻し、木版の表現に深く魅了されました。在学中に制作した、木版画とシルクスクリーンを併用した『横目に薄闇な記憶』と『横目の白昼』は、私自身の独自性を確立できた手応えを感じた作品です。『横目に薄闇な記憶』は版画の公募展で賞候補に入り、この作品を見た東京のギャラリーからお声がけいただき、『版画展セレクション』に参加する機会を得ました。

私は木版画とシルクスクリーンを併用した作品を多く制作しています。木版画は、ベタ面を摺った際に出る木目や、少しマットな質感、色の混合による複雑な深みなど、私が表現したいことをそのまま形にできる技法です。また、主版として線版をよく取り入れますが、手描きの線よりも、必要な情報だけを際立たせて残せる点も魅力に感じています。

一方、シルクスクリーンは、版画の平面的な表現から脱し、独自の表現を探るために取り入れています。水性インクの他に、熱を加えることで膨らむインクを混ぜて刷り、作品にもこもこした立体的な質感を出しています。

作品に生かすために大切にしているのは、日常のふとした瞬間や出来事から得る感覚です。

作品のモチーフとなるのは、

普段は意識しないけれど、どこかで見たような景色や日常的な光景。そこに少しでも想像を絡ませています。『横目に薄闇な記憶』や『横目の白昼』も、「確かにこんな景色がある!」「面白い視点」と好評をいただきました。

今回の個展『今日の青と次の春』は、季節が冬になることを意識した展示です。

『今日の青』は、冬に向かい陽が落ちるのが早くなることで、外の景色が青や黒に近い藍色といったさまざまな青色に変化していく様子を表しています。少しずつ色味が異なる青の作品を通して、この季節特有の心境を皆様と共有したいという想いから、このタイトルをつけました。

そして『次の春』。寒さが深まると、自然と暖かい春を待ち望むようになります。これから訪れる厳しい寒さを乗り越えるために

も、少し早いですが、作品から来年の春を先取りして感じていただけると嬉しいです。

版画には様々な技法があり、刷る媒体の種類も豊富で、摺り方次第でインクの見え方や発色を大きく変えることができます。今後も版画だからこそできる新たな表現の可能性を探っていきたく考えています。また、版画作品を日常生活に取り入れられるような親しみのあるものにしたいと常に願っています。これからも「ふとした瞬間」を逃さないよう、積極的に作家活動を続けていくつもりです。

### 佐藤寧音

2001年、札幌市生まれ。

温かみのあるベタ面をメインに摺った木版画と、もこもこしたシルクスクリーンを併用した作品を中心に、版画作品を制作。札幌大谷大学芸術学部美術学科造形表現領域版画専攻卒業。日本版画協会準会員。

●Instagram @ne.satobata

入場  
無料

北海道文化財団アーツスペース企画展vol.62

佐藤寧音 個展『今日の青と次の春』

2025.10.22～2025.12.26 9:00～17:00

※土日祝休館 ※ただし11/29(土)は開館  
※都合により臨時休館する場合があります  
場所／札幌市中央区大通西5丁目11大五ビル3F 問い合わせ／011-272-0501

詳しいSTORYはWEBで



市民の憩いの場として親しまれているながめコミュニティ公園。広大な敷地に鎮座するのは、1994年に制作された石狩市在住の美術家・川上りえによる作品です。



募集中の事業

●令和8年度事業募集のご案内

道民の皆さんの幅広い文化活動の振興を図ることを目的に、令和8年度に北海道文化財団が共催・助成等を行う事業を募集します。

【募集事業】

- ・まちの文化創造事業  
地域の皆さんが自主的に取り組む文化活動事業
- ・アートシアター鑑賞事業  
優れた舞台芸術の鑑賞機会を提供する事業
- ・アドバイザー派遣事業  
文化活動を担う人材育成に関する事業
- ・文化交流事業  
文化交流の促進に関する事業
- ・こどもアート体験事業  
子どもたちを対象とした芸術普及事業

【対象となる事業】

令和8年度(2026年4月～2027年3月)に実施する事業

【対象団体】

- ・地域文化団体
- ・市町村
- ・市町村教育委員会
- ・実行委員会
- ・公立文化施設の管理・運営団体
- ・学校(アドバイザー派遣事業に限る)

【応募期限】

2026年1月29日(木) 13:00必着

【応募方法】

期限までにメールでお申し込みください。

メールアドレス: keikaku@haf.jp

提出書類、結果通知時期、留意事項など詳細については、財団ホームページ「令和8年度事業募集([https://haf.jp/project\\_r8.html](https://haf.jp/project_r8.html))」をご確認ください。



【問い合わせ】

公益財団法人北海道文化財団

電話: 011-272-0501(8:45～17:30 土日祝を除く)

メールアドレス: keikaku@haf.jp

公演情報

●山本卓卓の高校生のための劇作ワークショップ  
リーディング発表

作家で範田遊泳代表の山本卓卓さんを講師に迎えて開催する、高校生のための劇作ワークショップ。ワークショップで創作した作品をリーディングとして発表します。

リーディング発表

日時: 2026年1月25日(日) 14:00開演

会場: 扇谷記念スタジオシアターZOO

リーディング発表の詳細については、12月中旬に、財団ホームページでお知らせします。

講師: 山本卓卓(やまもと すぐる)

作家/範田遊泳代表

幼少期から吸収した映画・文学・音楽・美術などを芸術的素養に、加速度的に倫理観が変貌する現代情報社会をビビッドに反映した劇世界を構築。オンラインで創作する「むこう側の演劇」や子どもと一緒に楽しめる「シリーズ おとなもこどもも」、青少年や福祉施設に向けたワークショップ事業など、幅広いレパートリーを持つ。アジア諸国や北米での公演や国際共同制作、戯曲提供も多数。『幼女X』でBangkok Theatre Festival 2014 最優秀脚本賞と最優秀作品賞を受賞。『バナナの花は食べられる』で第66回岸田國土戯曲賞を受賞。



●た組『景色のよい観光地』

『ドードーが落下する』で第67回岸田國土戯曲賞を受賞するなど、劇作家・演出家・映画監督として、その才能を多岐にわたって開花してきた加藤拓也による最新作を、札幌のジョブキタ北八劇場にて上演します。

作・演出: 加藤拓也

出演: 平原テツ 田村健太郎 安達祐実

宮崎秋人 吳静依

日時: 2026年2月14日(土) 18:00開演

15日(日) 14:00開演

会場: ジョブキタ北八劇場

詳細が決まり次第、財団ホームページでお知らせします。

INFO



WEBマガジン「北のとびら」。冊子にはない情報も!ぜひご覧ください。

WEBマガジンはこちらから! <https://haf.jp/kitanotobira/>